

ココロで見る奈良

もっともこと
知りたい
奈良⑨

■正倉院展

今年、正倉院展は第70回の節目を迎える。
天平勝宝8歳(756)5月2日、聖武天皇が亡くなった。56歳だった。それから49日が過ぎ、光明皇后は天皇の遺愛の品々を東大寺の大仏に献納した。これが正倉院宝物となる。

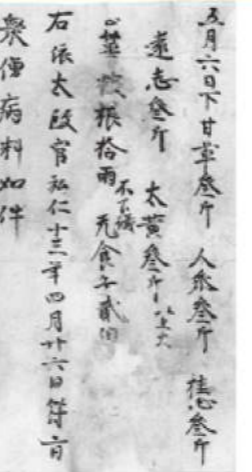
同じ日、光明皇后は60種の薬も大仏に奉納した。病気がちだった聖武天皇のために集められたものである。飲んでほしい人はもうこの世にいないのに、大量の薬だけが残っているのは悲しい。

遺愛の品々や薬を献納する際に、光明皇后はそれぞれ献物帳(目録)を作成した。それが「国家珍宝帳」と「種々薬帳」である。

「国家珍宝帳」は、献納した理由を「触目崩摧」と記している。目に触れると崩れ摧(くだ)けてしまう。

聖武天皇の遺愛の品々が手元であり、それらが目に触れると、天皇がお元気だった昔のことが思い出されて辛くなり、心が崩れ摧けてしまう。それならば、すべてを大仏に献納し、天皇の冥福を祈ろう。

光明皇后の耐えがたい深い悲しみによって、聖武天皇の遺愛の品々は、現代にまで伝えられることになる。



雑物出入帳

「種々薬帳」には、これらの薬を病気の人のために使うようにと記されている。

そして、これらの薬を服せば、「万病悉除(どんな病気も治る)」「千苦皆救(どんな苦しみからも救われる)」と書かれている。

体の病と心の苦しみ。どちらもだいじょうぶなら、それで言い尽くしているように思うが、さらにもうひとつ、光明皇后は「無天折(幼いうちに死なない)」と記している。

聖武天皇と光明皇后との間に生まれた待望の皇子は、満1歳を迎えることなく夭折した。

それから28年が過ぎ、夫である聖武天皇が亡くなった。薬の目録を作成しながら光明皇后は、「あの時、この薬があれば、あの子は死なずにすんだのに」と考えたのではないだろうか。

皇子が亡くなった2年後、光明皇后は施薬院(病院)をつくる。子どもの死が契機となったのだと思う。正倉院の扉を開き、薬はしばしば施薬院へと運ばれた。

今年の正倉院展で展示される「雑物出入帳」には、病気の僧に施すため、甘草、人参、桂心、大黄などを正倉院から取り出した記載がある。

光明皇后の悲しみが生んだ正倉院宝物が、1250年以上の時を超えて、私たちを魅了し、励ましてくれる。これが正倉院展である。

文・西山 厚

(帝塚山大学文化創造学科教授)

○10回シリーズ 次回は8月23日(木)掲載予定

PR

〈企画・制作〉産経新聞社メディア営業局